With Letters, "Plain Living and High Thinking"

Aoyama Sapience

第36号

青山学院大学 文学部 英米文学科同窓会　会報

2016年12月15日発行

■巻頭随想■

キュレーター職：書道と英語を媒介に

大木貞子

イェール大学美術館（Yale University Art Gallery）でキュレーターの仕事を始めて17年がたちます。1970年英米文学科卒業後、美術史をミシガン大学で学び、人生の紆余曲折を経ながら1984年に博士号を取得。ヴェトナム史専門の前夫の仕事の先々で国際経験を積み重ね、その後離婚に至る道程で本格的にフルタイムの仕事を始めたのは、もう人生半世紀に手が届く頃でした。

1996年、ニューヨーク市のコロンビア大学付属中世日本研究所で、2年半後に開催予定の日本初の女性禅僧無外如大を記念する「尼門跡寺院の秘宝」展並びにシンポジウムの日本語に関する一切合財を任されました。作品の借用書類作成から、カタログ作成、かなづち片手の展覧会場設定まで。加えて大聖寺所蔵の色紙短冊にまつわる小論も出版しました。それまでは、各地で美術史を教えていたので、オフィス仕事のABCさえ知らず、この経験でキュレーター職への実地訓練ができたといえます。

1999年、イェールの日本美術専門のキュレーター職に就き、ようやくこれまで培ってきたものをフルに生かすことができると思いました。キュレーター職は美術品を展覧説明することを通して文化を伝授するのが主たる役割なのですが、アメリカの富豪達が集まるイェールでは、卒業生から寄付される美術品を偏らないように調整するのは、並大抵の苦労ではありません。教える仕事はそれだけで明確な意義がありますが、自分の一年分の給料よりはるかに高価な美術品の鑑定から受け入れまでにはさまざまな駆け引きもあり、仕事に関する迷いがありました。

そんなある日、ルイス・カーンの建築として有名な美術館内の螺旋階段を降りて行くと、ちょうど近所の小学生達が先生父兄に付き添われて神妙に入ってきました。多くは黒人の子供達でしたが、皆大きな目を輝かせています。私の目頭は熱くなり、迷いは去りました。「ようし、この先何百年も誇りにできる美術品を見せよう。」その後、特別展では「茶の旅路」展（2009年）、「屏風の煌めき」展（2014年）を通して日本文化の孤立性より適応性、外から学んだ物を如何に独自の物に昇華し発展させているかを展示報道しました。

初等部から大学まで青学で育った私は受験地獄を経験せずにすみ、小学校2年から近所の書道塾に通いはじめ、師範をとるまで続けることができました。書道を通して学んだことは、美術品の解読鑑定に大いに役立っているのみならず、墨と空間との拮抗の解釈、更に精神集中力まで培われていたと、やっと今になって理解できた次第です。英語も最初は歌を歌うことから始まって、水の如く違和感を持たずに吸収できました。大学在学中に学生運動で正門もバリケードで塞がれた状況下で、真剣に自分の人生の道を考えさせられながらも、美術史とは何なのか解らない状態でその道に踏み込んだのですが、自分の好きな二つの学問をつなげる職を与えられ、日本美術の紹介に心砕く毎日です。

イェール大学美術館 キュレーター
（'70年卒）

Sherlock Holmesの英語（4）

ある北欧の英語学者が、英語は 副詞化した言語（language of adverbialization）と言ったが、実際、Sherlock Holmesの英語を読んでみると、副詞が実に多く使われており、調べてみると、約600の–ly副詞が使われていることが分かった。その中で、特に多く使われている副詞ベストテンをあげると、certainly, hardly, really, suddenly, exactly, surely, possibly, clearly, finally, entirelyである。これらの副詞は動詞や形容詞を修飾する通常の働き（例(1),(2),(3)）に加えて、相手の発話に対して反応する、いわゆる反応詞としてもよく使われる（例(4),(5)）。

(1) *Suddenly*, however, he started, tapped me on the shoulder… (The Speckled Band: 266)

(2) "It is a pity, because in other respects you would *really* have done very *nicely*." (The Copper Beeches: 320)

(3) Two lines of footmarks were *clearly* marked along the farther end of the path… (The Final Problem: 479)

(4) "Yes, today." She stood smiling. Holding up a little slip of paper in the air. "May I see it?" "*Certainly*." (The Man with the Twisted Lip: 238)

(5) "Could we not get a warrant and legalize it?" "*Hardly* on the evidence." (The Bruce-Partington Plans: 926)

ついでながら、それら以外によく出てくる反応詞として、'quite so'や 'on the contrary' などがある。

(6) "No. If she can come to Winchester to meet us she can get away. "*Quite so*. She has her freedom." (The Copper Beeches: 323)

(7) "I can see nothing," said I, handing it back to my friend. "*On the contrary*, Watson, you can see everything…" (The Blue Carbuncle: 246)

さらに、場面によって、Holmesの応答の違いが、副詞によって、微妙に違って表現されていることが分かる。

(8) "I was aware of it," said Holmes *drily*. (A Scandal in Bohemia: 164)

(9) "Pray sit down on the sofa," said Holmes *gently*. (The Boscombe Valley Mystery: 215)

(10) "Get back into your chair!" said Holmes *sternly* (The Blue Carbuncle: 255)

(8)はボヘミアの国王がなぜ偽って来たかを説明している場面。(9)は病気あがりの依頼人に対して言った場面。(10)は男が床に座って許しを乞うている場面。

このように、副詞の働きは実に多様であり、Sherlock Holmesを読む際、副詞に注意しながら読むと、一層興味が増してくるであろう。

秋元実治 青山学院大学名誉教授
（'65年卒）